

句の「左端」をめぐる諸問題

塩原佳世乃

音声言語における語順

本発表は、シンポジウム「語順決定の諸問題」内で行われた5つの発表のうちの一つである。発表では、句の左端に関わる以下の相互に関連する二種の言語事実と、それらに対する音韻論的なアプローチを概観する。

- (1) a. 等位構造の韻律パターン、等位接続詞の実現の仕方とその類型（例えば英語の *and*、ポーズ、日本語のと、て、ポーズ、Kubo 2017, Shiobara 2019）、等位項の統語範疇（名詞句か前置詞句かなど）とその韻律について（Shiobara 2022a, b）。
b. 左枝条件違反をゆるす言語、等位構造制約に従わない言語や例の韻律特性とその類型（Oda 2017, Shiobara 2016, 2020）。

そして、語順の決定が言語計算のどの段階でどのように行われるのか、またそれが理論上どのように位置づけられるのかについて、Richards (2016)の Contiguity Theory や Chomsky (2021)の FORMSEQUENCE (FSQ)などの関連する先行研究の提案に触れながら、問題提起及び議論を行う。

音声言語における語順決定については、(2)のような統語的なアプローチ、(3)のような音韻論的なアプローチ、(4)統語と音のインターフェイスあるいは外在化の仕組みに帰するアプローチなど様々に提案されている。極小主義理論の研究方策のもとでは、統語部門を語順から解放する(3)あるいは(4)の方向性が探られる (Chomsky 1995 et seq.)。

(2) Syntax

e.g. Head parameter, Linear Correspondence Axiom (Kayne 1994), crossed branching (McCawley 1982)

(3) Phonology

e.g. Stylistic rules (Rochemont 1978), p-movement (Zubizarreta 1998), Phonological condition or filter (Shiobara 2016, 2020, 2022a, b)

(4) Syntax-phonology interface

e.g. Spell-out (Shiobara 2004, 2010), externalization (Dobashi 2019), Match Theory (Selkirk 2009)

これまで Shiobara (2016, 2020)において、Ross (1967)により提案された統語的な制約である左枝条件 (Left Branch Condition, LBC)の違反を許すように見える言語について、その例の音韻を観察することにより、左枝条件を音韻条件としてとらえなおすことを試みた。さらに Shiobara (2022a, b)において、日英語の NP, PP の振る舞いを比較し、その相違点を一部両言語の音韻特徴の違いに帰することを試みた。それらにおいて「音韻条件」の詳細、特に派生のどの段階でどのように適用されるのか、また前提としている言語機能のありようについて一部不明瞭なままとしていたため、本発表では新たな例を観察することにより、これまでの提案の理論的な位置づけを再検討することにする。以下、紙数の都合により、(1a)に焦点を絞って論じていく。

PP, NP, &P に注目して

Hirose (2007)は日英語において、(5)のような PP path に加えて(6)のような Nominal path が可能であることを指摘し、(6)について(7)のような等位構造を提案している。

(5) full-fledged temporal path

- a. That store is open [from 9 a.m. to 5 p.m.] every day.
- b. あの店は毎日[午前9時から午後5時まで]開いている。

(6) defective temporal path

- a. It will take [three to five days] for him to recover.
- b. 彼が回復するのに[3日から5日]かかるだろう。 (Hirose 2007: 548-549)

(7) 等位構造を持つ defective nominal path (based on Hirose 2007: 552)

- a. English: (from) [NP A to B] (to = adpositional coordinator)
- b. Japanese: [NP A から B] (まで) (から = adpositional coordinator)

Shiobara (2022a)ではさらに(8)に見られるような adpositional coordinator が省略された N-path の例を観察し、日英語の容認性の対比を、日本語の N-path が(9)の韻律条件を満たすのに対し、英語の N-path が(9)を満たさないこと、つまり両言語の韻律の違いにより説明をしている。

- (8) a. * My worktime is [nine (a.m.) five (p.m.)] every day except Sunday.
b. 私の勤務時間は日曜以外毎日 [9時5時] です。

(9) An N-path can stand on its own as long as it constitutes a prosodic unit (ϕ). (Shiobara 2022a)

さらに Shiobara (2022b)では(10)に見られる日英語の容認性の対比、特に英語において take の補部に PP が現れうることに注目し、その違いを両言語の P の性質の違いに帰し、さらに英語の path 表現における P の実現の仕方を Chomsky (2021)が提案する FSQ を採用して説明している。

(10) a. (*) It will take [from three to five days] for him to recover.

b. * 彼が回復するのに[3日から5日まで]かかるだろう。 (based on Hirose 2007: 551)

(11) With P_{from} - P_{to} (where $P_{to} = \&$), FSQ selects X_1 and X_2 of WS and yields: $\langle (P_{from}), X_1, P_{to}, X_2 \rangle$. (Shiobara 2022b)

さらに、日本語の等位接続詞の生起の仕方、特に(12)のようなバリエーションに注目し、英語の FSQ に基づく(11)に対応する日本語の FSQ に基づく規則として(13)を提案した。

(12) a. 達と南(と)が映画を見に行った。

b. 達、南が映画を見に行った。 (Kuno 1973, Shiobara 2019)

(13) With $\&$ - $\&$ と, FSQ selects X_1 and X_2 of WS and yields: $\langle (X_1, (\&と), X_2, (\&と)) \rangle$.

(based on Shiobara 2022b, partially modified)

本発表においては、英語における等位接続詞ではない P の生起の仕方についてさらなる例(14)-(16)を観察し、これらにおける P の振る舞いの違いは、それらの統語的性質ではなく、語彙意味的性質に帰されることを指摘する。

(14) Optional P: What I call lexically dependent P_{from} in P_{from} - P_{to}

a. It will take obviously [(from) three to five days] for him to recover.

b. I will give you [(from) three to five days] to finish this task.

(15) Semantically vacuous P

a. It will take [(for) three days] for him to recover.

b. It will take obviously [(for) three days] for him to recover.

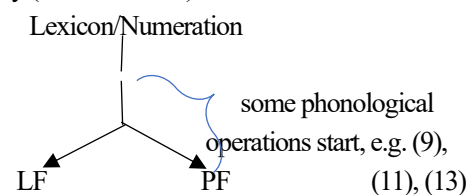
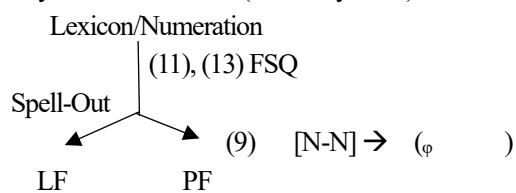
(16) Semantically unrecoverable P

I will give you [(until) the 25th] to finish this task.

言語機能の在りよう

ここまで語順の決定、等位接続詞の実現の仕方、P の実現の仕方は、(9)のような音韻条件あるいは(11), (13)のような語順を決定する規則により説明されうることを見てきた。特に(9)に注目すると、N-path は統語的には許容されないが、日本語においては(9)のような条件のもと音韻部門で容認されることになり、(9)は“rescue rule”として働いていることになる。しかし(8b)にあるような日本語の N-path は意味解釈を受ける必要があるため、(17a)のような言語機能の Y-model を想定すると、統語計算上許されない N-path がどのように意味解釈を受けるのか説明ができない。そこで本発表では、(17b)のように Richards (2016)の Contiguity Theory が提案する「一部の音韻操作は統語計算部門で始まる」ことを許すことにより、日英語の対比が説明できると主張した。

(17) a. Early minimalist model (Chomsky 1995) b. Contiguity Theory (Richards 2016)



参考文献 (一部)

Chomsky, N. 1995. *The Minimalist Program*. The MIT Press. Chomsky, N. 2021. Minimalism: Where are we now, and where can we hope to go. *Gengo Kenkyu* 160, 1-41. Dobashi, Y. 2019. *Externalization: Phonological Interpretations of Syntactic Objects*. Routledge. Hirose, T. 2007. Nominal paths and the head parameter. *LI* 38, 548-553. Kayne, R. 1994. *The Antisymmetry of Syntax*. The MIT Press. McCawley, J. 1982. Parentheticals and discontinuous constituent structure. *LI* 13, 91-106. Oda, H. 2017. Two types of coordinate structure constraint. *NELS* 47, 343-356. Richards, N. 2016. *Contiguity Theory*. The MIT Press. Shiobara, K. 2010. *Derivational Linearization at the Syntax-Prosody Interface*. Hituzi Shobo. Shiobara, K. 2016. A phonological approach to left branch condition: Evidence from exceptions in Japanese. *MITWPL 79: Proceedings of FAJL* 8, 143-152, ed. by A. Sugawara, S. Hayashi, S. Ito. Shiobara, K. 2019. Spelling out the spell-out of an XP-YP structure: A case of coordinate structure. *JELS* 36, 169-174. Shiobara, K. 2022a. Remarks on Hirose's (2007) nominal paths. *Phonological Externalization* 7, 37-50, ed. by Hisao Tokizaki, Sapporo University. Shiobara, K. 2022b. A phonological approach to argument structure: NPs and PPs. *JELS* 40, 97-102.